

C年特定14 ルカ12章32-40節

〔直訳〕

32 恐れるな、小さな群れよ、

というのは、喜んだ父は、あなたがたの与えることを、あなたがたに国を。

33 あなたがたは売りなさい、持ち物を、あなたがたの

そして、あなたがたは与えなさい、施しを。

あなたがたは作りなさい、自分たち自身に、財布を、古くならないものを、

宝を、使い尽くすことのできない、天の中に、

そこには、盗人が、近づかない、虫も食い荒らさない。

34 なぜなら、ここに、ある宝が、あなたがたの、

そこに、心も、あなたがたの、ある。

35 ありなさい、あなたがたの、腰が、帯を締められて

そして、ともし火が、燃やされながら、

36 そして、あなたがたは、同じで、彼ら自身の主人を待っている人々と

とき、彼が戻る、婚宴から、

ようにと、来て、そして、叩いて、直ちに、彼らが開ける、彼のために。

37 幸い、それらの僕たちは、

ところの者を、来て、主人が、見つけるだろう、目を覚ましているのを。

まことに、私は言う、あなたがたに、次のことを

彼は帯を締めるだろう、

そして、食事の席に彼は着かせるだろう、彼らを、

そして、そばに来て、彼は仕えるだろう、彼らに。

38 第二であれ第三の時刻であれ、彼が来るなら、そして、彼が見つけるなら、そのように、

幸いである、それらの者たちは。

39 だがこのことを、あなたがたは知りなさい、次のことを

もし、知っているなら、家主が、どんな時間に、盗人が、来るかを、

彼は許さないだろう、彼の家が穴を通されることを。

40 そして、あなたがたは、いなさい、準備して、

というのは、あなたがたが考えないところの時間に、人の子が、来る。

〔新共同訳〕

32 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。33 自分の持ち物を

売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。

そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。34 あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」

35 「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。36 主人が婚宴から帰って来て戸をたたく

A'

B'

C

B

A

とき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。37 主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言っておくが、主人は帯を締め、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。38 主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。39 このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやって来るかを知っていたら、自分の家に押し入らせはしないだろう。40 あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

①構成

②a 32—34節

⑦ルカ12章13—34節では、まずたとえによって、富を自分だけのものとして蓄えることへの警告が語られる。次に、命や体のことで思い悩むなと命じ、必要なことは神が与えると教え、「ただ、神の国を求めなさい」と諭す。この教えに「小さな群れ」への呼びかけが続く。

①33—34節の並行箇所はマタイ6章19—21節であるが、32節はルカだけが伝えている。「恐れるな、小さな群れよ」と呼びかけ、「あなたがたの父」である神が「神の国を喜んであなたがたに与える」と告げる。「小さな群れ」はイエスによって招かれた者たち、神を「父」と呼ぶことのできる者たちである。

⑦「あなたがたは売りなさい」「あなたがたは与えなさい」「あなたがたは作りなさい」というように命令形が三つ重ねられている。この世の持ち物に替わるものは、「天の中に」ある。それは「古くならない財布」「使い尽くすことのできない宝」である。

②b 35—40節

⑦35節では命令形を使って「あなたがたの腰が…そしてともし火が…ありなさい」と述べ、36節では婚礼から戻る主人を待つ人のたとえを使って、「あなたがた」はその人と同じでありなさいと説いている。

①35—40節では二つのたとえが使われている。二番目のたとえが39節の二行目から三行目であるのは明らかである。39節の一行目と40節とは、聞き手に対する勧めを述べる命令形「知りなさい」「いなさい」を使っており、たとえに含まれないからである。

⑦しかし、一番目のたとえの終わりがどこであるかはさほど明確ではない。38節の「第二であれ第三の時刻であれ」は宴会に出て行った主人の帰宅時間を指していると考えれば、38節までたとえが続いていると理解すべきである。

⑤しかし、37節後半に描かれた主人の行動(「帯を締めて、…席に着かせ、…仕える」)は普通には考えられないことであり、たとえにふさわしくないことだとも言える。そうであれば、たとえば36節で終わっており、37—38節の「主人(キューリオス)」はもはや宴会に出て行った主人ではなく、イエス・キリストを指すことになる。キリストに従う者を待ち受ける食事は、主イエスが「帯を締め」、彼らを「席に着かせ」、「仕えるだろう」食事である。

⑤38節。この段落でも、37節前半の「見つける」と「幸い」が使われている。キリストの到来は遅くなるだろうが、目覚めているのを「見つけられる」者たちは「幸い」である。

④39—40節。最初に命令形を使って「あなたがたは知りなさい」と述べ、そして知るべき内容を、たとえを使って語り、最後は「あなたがた」は「いなさい」と命令形を使って全体を閉じている。

④35—36節と39—40節は「あなたがた」への命令によって対応し、37節前半と38節は「見つける」と「幸いだ」によって対応している。このような構成から考えると、35—40節の中心は37節後半の「主人が給仕する食事」にあると言える。

②神は神の国を喜んで与える(32―34節)

- ①神は「小さな群れ」に救いを喜んで与える。神の喜びとなった小さな群れは、そのあり方を現す者として生きていく。神の喜びにふさわしい行動が33―34節に示される。
- ②この世の持ち物との関係が「売る」「与える」によって表される。持ち物を売って自分から放し、他者へと与える。ここから新しい廃れることのない持ち物との関係が始まる。
- ③「あなたがたの宝」は「天の中に」ある。天は「盗人が近づかない」「虫も食い荒らさない」ところであるから、宝は盗み取られることはなく、財布もぼろぼろになることはない。「盗人」は39節にも用いられており、盗人が近づかない天と、簡単に盗人に入られてしまうこの世とが対比される。

③帯を締め(35―36節)

- ①「あなたがたの腰が帯を締められてありなさい」。これは「いつも帯をしていることによって、あらためて腰に帯を締めるように」と言われる必要がないようにしなさい」という意味。「帯を締める」とは、仕事の妨げにならないように長い外衣の裾をたくし上げることが意味する。
- ②「ともし火が燃やされながらありなさい」とあるのは、キリスト者が生きる「今」は夜にたとえられる状態だからである。夜が更けても、キリストが戻って来なければ、待ちくたびれて、うたた寝に誘い込まれても不思議はない。しかしそのような時こそ、腰に帯をして、ともし火を燃やして、しっかりと待ち続けるべきだとイエスは教える。「腰に帯を締める」のは、どのような状況にも対応できるようにと準備を整えるためである。大切なことはキリストへの熱心さを失わずに待つことである。
- ③キリスト者の待ち続ける姿が、36節では婚宴から主人が帰るのを「待っている人々」にたとえられる。「婚宴」と訳されたギリシア語は「結婚式」あるいは「宴会」の意味。パレスチナでの婚宴はいつ果てるともなく、長くなるのが普通であり、1―2週間にわたって続くこともあった(創二九27、三一四17、トビ八19)。
- ④婚宴から主人が帰る時刻は見当もつかないが、帰るのは確かであるから、じっと「待つ」ことになる。婚宴のたとえを使って説こうとしていることは、終末が思いのほか遅くなっても、信仰を失ってはならないということである。このたとえのポイントは「婚宴」そのものよりも、いつそれが終わるか分からない不確かさにある。

④幸いな僕(37節前半)

- ①主人が来るのは僕たちが「目を覚ましている」のを「見つける」ためである。「目を覚ます」と訳された語(グレーゴレオ)は、1コリント16章13節に「目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかりと立ち立ちなさい。雄々しく強く生きなさい」とあるように、イエスを信じて生きる者を表す言葉である。「目を覚ましている」は信徒を励まし、戒める言葉として初代教会で多く使われた(1テサ五6)。疲れや怠惰によつて眠り込まずに、行動へと目覚めている状態を表しており、今の世が眠りを誘う暗い夜であることが前提とされている。ここでの「僕たち」はキリスト教共同体に仕える者を意味する(ロマ一1、1コリ七22、ガラ一10。使四29、一六17参照)。
- ②「見つける」と訳された語(ヘウリスコー)は、ルカ15章の三つのたとえ話(「失われた羊」「失われた銀貨」「失われた息子」)が示すように、失われた人間を探し求めるキリストを表しているとも言える。キリスト者は目を覚まして愛する主人を待ち、主人はそのような僕との出会いを求めて帰って来る。僕が「目を覚ましている」のを主人が「見つける」とき、この両者が出会う。それは喜びの瞬間であり、救いの成就する時である。「目を覚ましている」とは、1コリント16

章13節に「信仰に基づいて」とあるように、信仰を失わずに、しっかりと立ち、雄々しく生きていく状態のことである。

⑤ 主人が給仕する食事 (37節後半)

① この段落は「まことに私はあなたがたに言う」という荘重な言い回しで始まる。「まことに」は原語では「アーメン」であり、「そのようになるように・本当に」の意味。ルカはこの表現を省くのが普通であるが、ここでは重要な意味を持つと判断したためか、伝承の通りに残している。

② ここでは、信仰を失わずに「目を覚ましていた」僕たちを「見つけた」主人が振る舞う食事の様子が描かれ、主人みずから「帯を締め」、僕たちを「食事の席に着かせて」、「仕える」。通常は僕が行うこれらの動作をこの宴では主人が行う。目を覚ましていた僕を見つけたイエスの喜びがそれほどに大きいからである。

③ この食事では主人と僕の役割が逆転しているが、それは神の絶対的な贈り物を強調するためである。主の再臨まで信仰に忠実な僕は、神が振る舞う終末の宴会にあずかることができる。17章7-10節(畑から帰った僕は、主人の食事を用意し給仕する責任を強調)と対比される。またルカはイエスを「僕」(二二24-27)、あるいは「苦難の僕」(二三6-25)として描いている。

⑥ 幸いな僕 (38節)

① 「第二であれ第三の時刻であれ」。ユダヤの習慣では日没から日の出までの時刻が三等分(6-10時、10-12時、2-6時)された。第二の時刻は10-12時(深夜)、第三の時刻は2-6時(夜明け)にあたる。ローマの数え方はユダヤと異なり、夜を四等分する。主人の帰宅の遅れが強調される文脈から考えると、ユダヤ式に従っていると考えられる。「深夜」も「夜明け」も誰もが睡眠に襲われる時間であるが、主人が帰れば、真の「幸い」に出会えると知っているから、僕は目を覚ましていた。

⑦ 準備して (39-40節)

① 39節のたとえの目的は、家主の不意をつく盗人の襲来を述べることによって、キリストの再臨の突然性を強調することにある。しかもここに使われた条件文「もし知っているなら」は、事実上反する条件を表す形になっている。家主は盗人が襲来する時刻を知らないから、泥棒に入られてしまう。それほどに、盗人は不意をついて侵入する。

② それと同じように「人の子」も不意をついて到来する。しかし常に目を覚まして「準備して」いれば、不意をつかれることはない。主人が帰るといふ希望に励まされ、目を覚まして信仰にしっかりと立ち、主の到来を待つ。

⑧ 目覚めて待つ

① キリストを信じる者の特徴は「目覚めて待つ」ことにある。目覚めて待つためには、まずは他者と共に生きることを求める神の思いに沿って、天に宝を積み、心を天に向ける必要がある。天に心を置くとは、神の国が必ず与えられることを信じて待つことである。主キリストが準備し、給仕する食事があると知っている者は、信仰に立って、希望という「ともし火」を掲げている。

② イエスはルカ18章8節で「人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いださるうか」と気遣っているが、ここで「見いだす」と訳された語は37節で「見つける」と訳されたヘウリスコーである。イエスが「見いだす」ことを望んでいるものは信仰である。従って、「目を覚ましている」僕とは、信仰にしっかりと立って、力強く生きる人のことである。